宮崎県立日南振徳商業高等学校　　平成２２年１１月２５日(木)

校長室だより　３２号

中　島　　悟

【キャッチフレーズ】

未来に残そう　伝え築いた　振徳商業
目指せ　三種目　日本一　！

【来週の行事】１１月２８日（日）　ワープロ検定
２９日（月）～期末考査、職員研修

１「想い出のひとこま」　旧職員　松山　典子　10周年記念誌より抜粋
２ 出逢ったいい話『難病と闘う子どもたちの夢を叶える』『致知』2000年5月号より抜粋

「想い出のひとこま」（原文）　旧職員　松　山　典　子

私は昭和４７年４月から５ケ年間勤務致しました。今は馬越の坂から眺め乍ら、あの振徳時代の日々を思い出しております。

３代にわたる校長先生や諸先生方何百人もの生徒の皆さん達、如何お過しでしょうか？

１０周年のお知らせに、月日の流れの早さに驚きつつ、もうそんなになるのかなーと感概無量です。

振徳商業高校は約５３０名の生徒数でとても理想的な人数で、一人一人と親しく接し友達になれて教育的にも丁度適当な人数だったと今もつくづく感じています。和を深め真理の探究に集う皆さんはしっかりしていて礼儀正しく素直でしたね。社会にはばたく前のスタートラインとして最高の学園だと信じています。

丁度今から５年前だったでしょうか？県下の商業高校の珠算大会が振徳でありました。丁度私の友達の先生が見えて、前年度の西都商の事を礼儀その他県下一とばかり思っていたけど、振徳に来て見て上には上があるものですねと大変ほめられた事をおぼえています。人とのつき合いは礼儀から。通勤の途中生徒の元気な挨拶に振徳の門を入り乍ら、よし今日も又元気で頑張るぞとふるいたつような情熱が湧いて来たものです。振徳に来て初めて女子バレー部を持ち手さぐりで体当りした事、部員達が熱心でとてもたのしく、小さい身体でよく拾いよく動き廻ってベスト８に入った時の喜び。

クラスの委員長が一年中教室に花を飾りクラスをより明るくしてくれた事、又学園祭では全員が協力し合って「岩壁の母」を上演し最優秀賞をもらった事等、思い出しては私もあの頃までが青春時代でもあったような気がします。とりとめもない思い出となりましたが、この一こま一こまが私の心の中に生きております。振徳商業高校がどうぞ何時までも開校以来の若さと情熱で尚一層の御繁栄とみなさんの御健勝を祈念し１０周年記念を祝福し筆をおく事にいたします。

出逢ったいい話　『難病と闘う子どもたちの夢を叶える』

ボランティア団体、メイク・ア・ウィッシュ オブ ジャパン
事務局長、大野寿子　さんの記事をご紹介します。

メイク・ア・ウィッシュは「願いごとをする」という意味で、難病と闘う子どもたちの夢や願いをかなえるため、昭和５５年にアメリカで設立された国際的なボランティア団体です。

私が活動に参加した平成６年は、東京に事務局ができたばかりの開拓期でしたが、

いまや登録ボランティアの方の数も、８００人を数えるまでになりました。
　ムコ多糖症という病気にかかっていた正平君という子がいました。全国でも７０人しかいないという難病で、血液中の老廃物がたまって脳を圧迫するために、徐々に人間的な感情がなくなり、言葉を忘れ、コミュニケーションがとれなくなるのです。ところが正ちゃんは、「イルカと遊びたい」という願いをかなえていく中で、言葉をどんどん取り戻していったのです。
　もっと感動的だったのは、その日は正ちゃんの誕生日だったので、みんなで誕生パーティーをしたんです。それまでは誕生日がくるたびに病気が進むから、お母さんはとてもお祝いなんかする気になれなかったそうなんです。でもみんなで「おめでとう!」って言ったら、正ちゃんは嬉し涙をポロポロと流して、「ありがとう」って言ってくれたんですよ。本当にびっくりして、みんな胸がキュンとしました。
　また、すべての子がそうなるわけではありませんが、あと数日しか持たないと言われた子が、持ち直すことだってあるんですよ。
　雄貴君は、ウェルドニッヒホフマン病にかかって、自力で呼吸することができず、まばたきが唯一の表現手段でした。彼の願いは、「ウルトラマンと一緒に戦いたい」というものでした。そこで、岐阜から熊本にあるテーマパークまで行き、雄貴君のための特別台車でウルトラマンと怪獣が闘い、雄貴君も一緒に目で闘ったんです。そして怪獣をやっつけたウルトラマンから、「雄貴君、君のおかげで怪獣を倒すことができた」と言ってもらったんです。
　雄貴君は生後１か月で人工呼吸器を付けることになったのですが、その呼吸器になかなか慣れずに苦しんでいる姿を見てお母さんは、このまま生きていくことが、この子にとって本当に幸せなことなのかって、すごく悩んでいたそうなんです。だけどそのとき「雄貴、生きててよかったね。 こんなに嬉しいことがあるんだもの」って涙ながらにおっしゃったんですね。その直後、雄貴君は一時生死の境をさまよいました。そのときお父さんは思わず、「雄貴、今度はお前がウルトラマンからパワーをもらえ!」と叫んだんです。そうしたら何と、雄貴君は奇跡的に危篤状態を脱したんです。
　あるお母さんから、「いままで、子どもと自分たちだけが病気と闘っているような気でいましたが、たくさんの人が応援してくれていることに気づいて、すごく嬉しく思いました」と、ボランティア冥利に尽きるような言葉を頂きました。そのときは、飛び上がるくらい嬉しかった。そんな言葉を頂けるのも、１人ひとりを大切にしているからだと思うんです。私たちは、毎回たった１人のために、多くの方々から頂いた支援金を使わせていただいて、願いをかなえるお手伝いをしているのです。でも、そんなお金があるなら、もっとたくさんの子にいろんなことができる、と言われることもあるんですね。確かに、何百人もホールに集めて「みんな頑張れよ」とやったほうが効率はいいでしょう。でも、自分１人のために「〇〇ちゃん、頑張れよ」と言ってくれたら、重みがまったく違うんです。
　だからこそ、奇跡を起こすほどの喜びも生まれるし、それに接した周りの人間がものすごいエネルギーをもらえるんです。結局、与えられることのほうがずっと多いんです。願いがかなって喜ぶ子どもたちの笑顔や、ときには奇跡のような出来事に接することで、ものすごくエネルギーをもらえるんですよ。ボランティアの人がこの仕事にのめり込んでいくのも、そこなんです